

都市近郊林利用者の動機と行動 —道立自然公園野幌森林公園を事例として—

森林・緑地管理学講座 花卉・緑地計画学分野
谷彩音

(背景と目的)都市近郊の森林は、人々が身近に利用できる場であり、近年のウォーキングブームや健康志向の高まりの中で、日常的なレクリエーションの場として期待される。多様な利用がみられることから、混雑感や利用者同士のコンフリクトなど社会的な影響も懸念される一方で、国内の都市近郊林において、レクリエーション利用に関する情報が明らかにされた例は少ない。ウィーン市近郊の森林におけるモニタリング調査からは、立地の異なる森林では、利用者数や活動に違いがみられることが示されている(Arnberger, 2006)。

そこで本研究では、野幌森林公園を対象として、これまで利用の実態が明らかにされてこなかった入口で利用者の数や意識を把握するとともに、立地や周辺環境の異なる場所での利用の実態の違いを比較した。そして、都市近郊林のレクリエーション空間としての管理や情報提供のあり方について検討することを目的とした。

(方法)道立自然公園野幌森林公園は、札幌市中心部から東へ約11~15 kmに位置し、面積2,051haの平地林である。森林には5か所の主要な入口があり、大沢口は住宅地に近くアクセスが良い一方、トド山口や登満別口は農地に面し、アクセスが悪い。

2008年11月から2009年10月の1年間、大沢口、トド山口、登満別口で赤外線カウンターによる利用者数の自動計測を行い、利用者数の年間変動を予測した。また、2006年に大沢口で、2009年にトド山口と登満別口で意識調査を実施し、利用者の来訪形態および動機を比較した。

(結果)年間の総利用者数は、大沢口で77,939人、トド山口で7,603人、登満別口で10,301人と予測された。利用者の動機は自然観察、非日常、健康維持など多様で、どの入口でも健康や自然に関する動機が重視されていた。一方で、自然や健康を重視する人は大沢口に多く、非日常を重視する人は登満別口に多いなど、入口ごとに利用者の志向性が異なることも示された。

(考察及び結論)立地や周辺環境、アクセス性の異なる場所では利用者数に差がみられ、利用者の志向性も異なったことから、森林の管理においては、場所の特性と利用者のニーズを把握した上で、多様なレクリエーション体験への期待に応じた方策が望ましいと考えられた。具体的には、空間ごとに特徴を持たせたゾーニングを行うこと、利用者が自らの好む活動ができる空間を選択できるよう、混雑が予想される場所や日に関する情報を提供することなどが有効であろう。

参考文献

- Arnberger, A.(2006):Recreation use of urban forests: An inter-area comparison:Urban Forestry & Urban Greening, 4, 135-144